

七郎兵衛と鉄砲用水



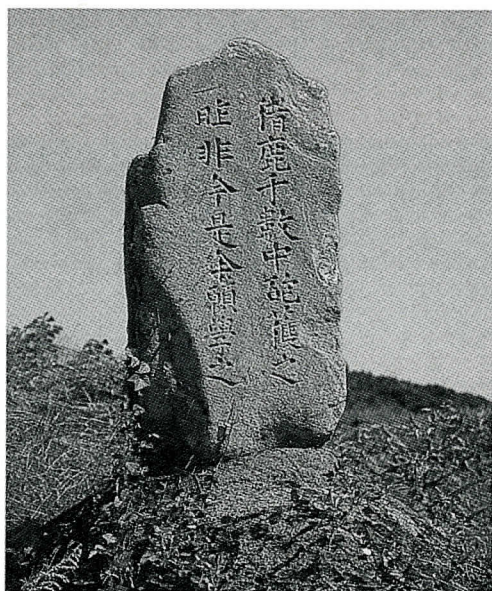
▲竜岩から見た本道寺の集落（撮影：谷 昭佳）

江戸時代のことです。本道寺村（筑紫野市大字本道寺）は、宝満山の東南の山付にある村で、田には水がかかりにくく、農民はたいへん難渋していました。村はずれの鳥淵という所では、まるでそのことをあざけるかのように、いつも鳥が“ヒンコツ、ヒンコツ”と鳴いていました。こんな苦しい日々がいつまで続くのか。村人は毎日そう思いながら働いていました。ある日、鉄砲の名人でみんなから千匹じいさんと呼ばれていた平嶋七郎兵衛は、あることを思いつきました。「もし宝満川の水を村に引くことができれば、この苦しみから救われるはずだ。用水路をつくるため、私が鉄砲で測量してみよう」。しかし、川は村のずっと下のほうを流れており、とても用水を引くことなどできそうにありませんでした。郡奉行に工事を願い出ても、本気でそんなことを考えているのかと一笑に付される始末です。それでも七郎兵衛は諦めずに測量にかかりました。そして、龍岩（現在の自然の家）

から用水路を引けば水は村へゆきわたるはずだ、と確信を得た彼は、もう一度郡奉行に願い出て、「もし工事が失敗すれば、私の白髪首をさし上げましょう」と命がけで許可を受け、やっとのことで工事にとりかかりました。工事は役人が言ったとおり難航し、村人の多くは途中で諦めてしまいましたが、それでも七郎兵衛は、残った者をはげましながら続行しました。どれくらいの費用と時間を要したのか、また、どのような方法で測量したのかは定かではありませんが、当時としてはたいへんな工事であったろうことは想像できます。果たして用水路は完成し、これによってハタケ田といわれた水がかりの悪い二町（約2万㎡）余りの田に水がゆきわたり、米の収穫を上げることができるようになりました。宝満川から取水することは川下の村との間に水利権の争いを引き起こしかねず、さぞかし交渉も大変だったでしょう。

さて、この用水の完成によって米の収穫量

が増えたので、藩主から特別に褒美を賜ることになりました。そこで、七郎兵衛は小さくともよいから自分の家の入口に門を作っていたと願い出たそうです。じつは七郎兵衛の心の内には、たとえ藩主であろうとも、自宅を訪れるときには馬から降り、頭を下げて門をくぐらねばならない、という見返しの気持ちが込められていたのだと伝えられています。この「拝領門」は、もう壊れて無くなりましたが、捕獲した猪や鹿を供養する目的で七郎兵衛が建てた「猪鹿塚」が、村の旧道端に残っています。それには「猪鹿千数中砲獲之／昨非今は余願学之／平嶋七郎兵衛 五十一／元文三戊午年 如月日」と刻まれています。元文3年は1738年で、鉄砲用水の完成もこの頃でしょう。また、猪鹿塚の周辺がかつてハタケ田と呼ばれた耕地で、用水は今でもこの一帯を潤しています。（山村 淳彦）



▲猪鹿塚（撮影：谷 昭佳）

